

[B年] 聖霊降臨節第14主日(2022年9月4日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 5章1～7節**

- 1 わたしは歌おう、わたしの愛する者のために
そのぶどう畑の愛の歌を。
わたしの愛する者は、肥沃な丘に
ぶどう畑を持っていた。
- 2 よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。
その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り
良いぶどうが実るのを待った。
しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。
- 3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ
わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。
- 4 わたしがぶどう畑のためになすべきことで
何か、しなかったことがまだあるというのか。
わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに
なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。
- 5 さあ、お前たちに告げよう
わたしがこのぶどう畑をどうするか。
囲いを取り払い、焼かれるにまかせ
石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ
- 6 わたしはこれを見捨てる。
枝は刈り込まれず
耕されることもなく
茨やおどろが生い茂るであろう。
雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。
- 7 イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑
主が楽しんで植えられたのはユダの人々。
主は裁き(ミシュバト)を待っておられたのに
見よ、流血(ミスパハ)。
正義(ツェダカ)を待っておられたのに
見よ、叫喚(ツェアカ)。

【使徒書日課】 使徒言行録 13章44～52節

44次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉を聞こうとして集まって来た。45しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたま、口汚くのものして、パウロの話すことに反対した。46そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。47主はわたしたちにこう命じておられるからです。

『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、あなたが、地の果てにまでも救いをもたらすために。』」

48異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。49こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。50ところが、ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追出した。51それで、二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った。52他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

【福音書日課】 マルコによる福音書 12章1～12節

1イエスは、たとえ彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。2収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。3だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせなくて帰した。4そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。5更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。6まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。7農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』8そして、息子をつまえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。9さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。10聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』

11これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』」

12彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 5章1〜7節

- 1 私は歌おう、私の愛する者のために
ぶどう畑の愛の歌を。
愛する者は肥沃な丘にぶどう畑を持っていた。
- 2 彼は畑を掘り起こし、石を取り除き
良いぶどうを植えた。
また、畑の中央に見張りのやぐらを立て
搾り場を掘った。
彼は良いぶどうが実るのを待ち望んだ。
しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。
- 3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ
私とぶどう畑の間を裁いてみよ。
- 4 ぶどう畑に対してすべきことで
私がしなかったことがまだあるか。
私は良いぶどうが実るのを待ち望んだのに
どうして酸っぱいぶどうが実ったのか。
- 5 そこで今、あなたがたに知らせよう
私がぶどう畑にしようとしていることを。
垣根を取り払い、荒らされるに任せ
石垣を壊し、踏みつけられるに任せる。
- 6 私はこれを荒れ地にする。
枝は刈り込まれず
耕されることもなく
茨とあざみが生い茂る。
私は雲に命じて、もはや雨を降らせない。
- 7 万軍の主のぶどう畑とは、
イスラエルの家のこと。
ユダの人こそ、主が喜んで植えたもの。
主は公正〔ヘブライ語→ミシュパト〕を
待ち望んだのに
そこには、流血〔ヘブライ語→ミスパハ〕。
正義〔ヘブライ語→ツェダカ〕を待ち望んだのに
そこには、叫び〔ヘブライ語→ツェアカ〕。

使徒言行録 13章44〜52節

44次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉〔異本→神の言葉〕を聞こうとして集まって来た。45しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどく妬み、口汚く罵って、パウロの話すことに反対した。46そこで、パウロとバルナバは堂々と語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だが、あなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命にふさわしくない者になっている。そこ

で、私たちは異邦人の方へと向かいます。47主は私たちにこう命じておられるからです。

『私は、あなたを異邦人の光とし

地の果てにまで救いをもたらす者とした。』」

48異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉〔異本→神の言葉〕を崇めた。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。

49こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。

50ところが、ユダヤ人は、神を崇める貴婦人たちや町の有力者たちを唆して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追い出した。51それで、二人は彼らに対して足の埃を払い落とし、イコニオンに行った。52他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

マルコによる福音書 12章1〜12節

1イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を造り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たち〔→小作人〕に貸して旅に出た。2収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。3ところが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋叩きにし、何も持たせないで帰した。4そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。5さらに、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。6その人には、まだ一人、愛する息子がいた。『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。7農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、財産はこちらのものだ。』8そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外に放り出した。9さて、ぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て、農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるに違いない。10聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石

これが隅の親石となった。

11これは、主がなさったことで、

私たちの目には不思議なこと。』」

12彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・9月4日「聖霊降臨節第14主日」の日課主題は「すべての人に対する教会の働き」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、いわゆる「ぶどう畑の歌」と呼ばれる寓喩的預言の箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、バルナバとパウロのピシディア州での宣教活動を伝える章句の終わりの箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「ぶどう園と農夫のたとえ」の箇所。

旧約日課(イザヤ5章より)

・「イザヤ書」は、三大預言書の一つで、ユダヤ正典「後の預言者」の最初に置かれ、「前の預言者」との懸け橋の役割を担っている。39章までと40章以下で時代背景が異なり、前者を「第一イザヤ」、後者を第二イザヤと区別するのが一般的である。「第一イザヤ」は、前8世紀末に南王国の宮廷預言者として活動した歴史的人物イザヤの預言の書として編纂されており、預言集と逸話伝承が組み合わせられて構成されている。この構成はほぼ年代順と考えられ、それによれば、日課箇所は、イザヤの活動初期、ウジヤ王の時代(在位＝前783～742年ごろ)の終わりごろと考えられる。ウジヤ王は、「列王記」では「アザルヤ」の名で述べられている比較的高評価の王である(王下15:1～7)。ウジヤ王の時代は、北王国イエフ王朝ヤロブアム王の時代(在位＝前786～746年ごろ)とほぼ重なり、アッシリアにティグラト・ピレセル王(在位＝前745～727年ごろ)が登場し覇権国として台頭してくる前の時代で、両王国は比較的安定した経済的繁栄を享受していたとされる。この時代の宮廷預言者の役割は、経済の活性化による弊害として生じていた格差問題や不正問題など、内政に関する課題を王に提示し、対応を促すものであったと推認される。これは、7章以下の預言で取り上げられる課題が、もっぱら外交に関するものに移行するのと対照的である。

・日課箇所は「ぶどう畑の歌」と称されてきたが、内容は、「ぶどう畑を巡る寓喩」を用いた預言(助言)である。「イザヤ書」は3:14で「ユダ・エルサレム」を「ぶどう畑」に譬えているが、日課箇所の場合、「イスラエルの家」が「ぶどう畑」に譬えられており、「ユダ・エルサレム」は傍観者である。基本的には、「ユダ・エルサレム」は南王国を、「イスラエルの家」は北王国を指すが、「イザヤ書」には、北王国滅亡(前722年ごろ)後の状況を踏まえた「大イスラエル主義」的思想の萌芽も見られ、「ユダ・エルサレム」と「イスラエルの家」に厳密な区別がされているかは不明。それでも、日課箇所の寓喩で指弾されているのは北王国としての「イスラエルの家」であると見るのが適当であろう。北王国は、イエフ王朝ヤロブアム王没後、一気に政情が不安定化し、アラム王国との同盟にもかかわらず、アッシリアの侵攻を阻むことはできずに滅亡した。その遠因は、すでにヤロブアム王時代に生じていたはずである。

・イエフ王朝ヤロブアム王の時代に北王国の宮廷預言者として活動し、後に南王国に亡命したと考えられるのが「ホセア書」の預言者ホセアで、「アモス書」の預言者アモスも同様の可能性がある。「ヨナ書」の預言者ヨナもヤロブアム王時代の宮廷預言者と考えられるが(王下14:25参照)、ヨナ自身が南王国に亡命した痕跡は見当たらない。日課箇所のような預言者イザヤの預言は、彼ら北王国から亡命してきた宮廷預言者のもたらしたであろう情報や思想の影響を受けていると考えられる。

・北王国の支配層による経済的不正や横暴は、「列王記」でオムリ王朝時代の出来事として強調されている(王上21章「ナボトのぶどう畑の逸話」など)。古い時代を背景とした逸話物語を用いて昨今の問題を指摘するのは、「譬え」を用いるのと並んで、常套手段である。日課箇所の寓喩は、「イスラエルの家」を示唆する「ぶどう畑」の破壊と荒廃までが描かれているが、ヤロブアム王没後の北王国内の混乱を踏まえているとすれば、この預言句を北王国滅亡後のものとみなす必要はない(もちろん、その可能性も捨てられない)。

使徒書日課(使徒13章より)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として著された「初代教会正史物語」で、おそらく、使徒ペトロの指導下にあった教会共同体とパウロの影響下にあった教会共同体との調和を図る目的で編纂され、正典化された文書。パウロは、もともと教会を迫害する側の立場であったが、幻の中でイエスと出会い回心、ダマスコの信者アナニアから洗礼を受けキリスト者として活動するようになったとされる。彼は、エルサレム教会の使徒名代でアンティオキアの教会共同体の指導者となっていたバルナバに見いだされて同地の教会共同体に加わり、バルナバの組織した宣教団に参画するようになった。日課箇所は、バルナバ宣教団がピシディア州アンティオキアの会堂で活動を重ねていたときの逸話物語の終盤部分である。

・アンティオキアの教会共同体は、もともと、主イエスのガリラヤ宣教以来の創設メンバー信者で構成されていたエルサレム教会にディアスポラ系ユダヤ人が参入した際に生じた軋轢・分離の結果、各地に離散したディアスポラ系ユダヤ人信者がそれぞれの地で組織され誕生した教会共同体の一つである。そこから派遣されたバルナバ宣教団の目的も、基本的にはエルサレム教会から離散したディアスポラ系ユダヤ人信者を各地の会堂で掘り起こし、彼らを基軸として教会共同体の支部を創設することにあった。そこで、バルナバ宣教団も、後のパウロ宣教団も、基本的にはどの地でもまず当地のユダヤ会堂に入って宣教活動をおこなったのである。

・紀元1世紀当時のローマ帝国内で、「ユダヤ人」は、皇帝から特別な権利を保障され、特異な社会集団としての地位を与えられていたことが知られている。

・それゆえ、当時のユダヤ人会堂やエルサレム神殿には、多くの異邦人が出入りし、関与を深めており、かなりの規模で改宗者としてユダヤ人社会に加入する異邦人の存在があった。つまり、当時の広義の「ユダヤ人社会」は、会堂や神殿を起点として、「生粋のユダヤ人」<「異邦人出身の改宗ユダヤ人(=改宗者)」<「異邦人のまま礼拝に参与する者(=神を畏れる者)」という広がりを有していた。この状況の中で、主流のユダヤ教は、割礼を受けて律法遵守を誓約した「改宗者(異邦人の改宗ユダヤ人)」までを正規の「ユダヤ人」=「神の民イスラエル」と認め、「ユダヤ会堂共同体」の成員として扱った。それに対して、「神を畏れる者(異邦人のまま礼拝に参与する者)」に割礼や律法遵守を課すことなく、彼らを「共同体」の成員として受け入れていこうとしたのが、パウロらの「異邦人伝道」の実態である。日課箇所は、「会堂」礼拝に参与しながら「会堂共同体」の正規の成員として認められていなかった異邦人らの存在を、パウロとバルナバが全面的に認め、主イエスの教えと実践に基づいて始めた新しい「共同体」の正規の成員としていくことを宣言した逸話として置かれている。ただし、ほぼ同じ判断をペトロが先行しておこなっていたことを、「使徒言行録」は10~11章で「百人隊長コルネリウス一家の洗礼」の出来事としてすでに描いている。

福音書日課(マルコ 12章より)

・日課箇所は、「ぶどう園と農夫のたとえ」として知られる逸話伝承で、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えている。場面設定は、前段「権威についての問答」の箇所(マルコ 11:27~33)と一体を成しており、共観福音書間で共有されているが、「マタイ福音書」は、二つの逸話伝承の間に独自の語録伝承「二人の息子のたとえ」(マタイ 21:28~32)を置いている。

・「ぶどう園と農夫のたとえ」は、主イエスが神殿境内で、祭司長、律法学者、長老たちと「教えを語る権威」について論争する場面の中で語られたものとして置かれており、きわめて論争的な言説になっている。この論争相手は、ユダヤ社会における指導者層であり、「ファリサイ派の人々」や「サドカイ派の人々」が挙げられていない。「ファリサイ派」や「サドカイ派」の人々は、この場面の後で、彼ら指導者層から送り込まれる人々として登場させられる。このような物語構成からは、主イエスを十字架刑へと追いやった「ユダヤ人」の中に、さまざまな異なる社会層、宗派の人々が含まれており、それぞれが異なる思惑でこの事案に関与していたであろうことが推測されるのである。

・「たとえ」は、「イザヤ書」や「エレミヤ書」が「ユダ・イスラエルの民」を「ぶどう畑」にたとえる事例を踏まえて、神から遣わされた者としての「預言者」と「神の愛する子」が指導者たちのもとで如何に扱われ、排斥されるかを明示的に語るものとなっている。

・この「たとえ」は、主イエスの死と十字架の予告(8:31)に対して、その意味を聖書的に提示するものの一つとなっている。すなわち、「神から遣わされながら迫害される預言者」の延長上にある「神の子」という理解である。歴史上の預言者が、どれほどの迫害を受けたかは定かではないが、「イザヤ書」の描く「主の僕の苦難」(イザヤ 53章)などが預言者像の背景にある。

来週の誕生日(9月4日~10日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-207 番「ほめよ主を」は、1960~70年代の礼拝改革運動の流れの中で英国教会司祭パワーズが作詞。曲は、20世紀米国の代表的な教会音楽家 R.W. ダークセンの作曲。
- ・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(=Ⅲ5番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともなうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蒔田尚晃が曲を付した。
- ・21-79 番「みまえにわれらつどい」(=Ⅱ179)は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讃美讃美で、19世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。
- ・21-81 番「主の食卓を囲み(マラナ・タ)」は、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏(ツグトシ)が、Iコリ 16:22の「マラナ・タ(主よ、来てください)」等に基づき、主の祈りの中心主題を黙想する中で10年かけて作詞作曲。新垣は第二ヴァチカン公会議後の典礼改革の中で進められた母国語聖歌創作をリードしてきた一人で、多くの聖歌・讃美歌が教派を越えて歌われている。

21-207「ほめよ主を」

We the Lord's People

1. We the Lord's people, / heart and voice uniting, / praise him who called us out of sin and darkness / into his own light, that he might anoint us / a royal priesthood.
2. This is the Lord's house, / home of all his people, / school for the faithful, / refuge for the sinner, / rest for the pilgrim, haven for the weary; / all find a welcome.
3. This is the Lord's day, / day of God's own making, / day of creation, day of resurrection, / day of the Spirit, sign of heaven's banquet, / day for rejoicing.
4. In the Lord's service / bread and wine are offered, / that Christ may take them, / bless them, break and give them / to all his people, his own life imparting, / food everlasting.

21-79「みまえにわれらつどい」

Let us break bread together

1. Let us break bread together on our knees;
Let us break bread together on our knees.
Refrain: When I fall on my knees, / With my face to the rising sun, / O Lord, have mercy on me.
2. Let us drink wine together on our knees;
Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
3. Let us praise God together on our knees;
Let us praise God together on our knees. [Refrain]